

◆連載-Vol.32

現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)
1948年神奈川県生まれ。1971年千葉大学建築学科卒業、『住宅特集』『新建築』編集長を経て1994年からフリー編集者。1999年～2014年千葉大学客員教授。

モダニズムの向こうへ その6

榎文彦 都市に息吹を与える

これまで生年順に、いろいろな建築家について記してきたが、そのほとんどがすでに他界している。今回、1928年生まれの最後となった榎文彦は来年卒寿を迎えるが、いまだに現役で衰えなどまったく見せない。超人と言うべきか。

1952年東京大学卒業後、丹下健三の研究室を経てアメリカに留学。クランブルック美術学院、ハーバード大学修士課程修了、SOM、セルト・ジャクソン建築設計事務所勤務、ワシントン大学、ハーバード大学で准教授として都市デザインを教え、1965年に榎文彦総合計画事務所設立。東京大学でも1979年から11年間にわたって教授を務めるなど、経歴は華やかに彩られており、最近では新国立競技場コンペのザハ案に対して規模と立地の歴史的な脈について異議を申し立てたことで一躍時の人となった。

まあ、それがなくとも建築界においては、四半世紀以上に及ぶ一連の代官山集合住宅がなんと言っても代表作のひとつとして知らぬものはないはず。知らない人はもう一度勉強し直した方がよい。

旧山手通りの一角、代官山入り口の交差点角地から始まった代官山集合住宅計画(ヒルサイドテラス)は、旧山手通りに沿って増殖し始める。1969年の第1期、第2期(1973)、第3期(1977)、と続き、ヒルサイドプラザ(1987)、ヒルサイドウエスト(1999)まで、実に30年にわたって街区をつくり続けた。さらに、この間に設計した「在日デンマーク大使館」(1980)もこの街区の一部となっている。そしてヒルサイドウエストには榎自身の事務所が入っている。

ここに現代都市の成り立ちを見るのは間違っているだろう

か。一気にできあがった都市など、歴史的に見てもほとんどあり得ない。ギリシャ、ローマの都市にしても何も無いところから始まり、成立するまでにはかなり長い時間がかかっている。

身近な例で言えば、伝統的建築物群も指定された町並みにしても、成立してから常に新陳代謝を繰り返していた。その意味からも都市は静物ではなく生き物である。

ヒルサイドテラスの第1期からウエストまで、表現としての外観デザインは変化しているが、空間の連続性というべきか、変化に富んだシーケンスは一貫している。それは建築だけにとどまらず、街路との関係、道行く人々との関係にまで、心地よい視覚的、体験的連続性を与えている。建物のデザインにおいて、個々の建物の竣工時期が気になるのは建築業界の人間くらいではないだろうか。どこの町であれ古い建物と新しい建物が混在して町並みを形成しており、その上で、その町の居心地がよいかどうか、そこに居合わせた人が判断すればよいのである。

実際に歩いてみればよい。散歩者は至る所で思わぬシーンと遭遇し、空間の変化を体験することができる。旧山手通りのなだらかな勾配に騙されてはいけない。その背後には目黒側に向かった急勾配が隠されている。それがかえって立体的な街区の空間構成を導き出したのかもしれない。

旧山手通りを挟んでいるのも好条件だろう。山手通りはすでに環状6号線として西側に移設されていて、交通量は半端ではない。もし、現在の山手通りや環状7号線の沿線だったら、現在のよう環境ができていたかは疑わしい。

榎は『見えがくれする都市』(1980)で、日本の都市や建築、空間性などについて論考している。そこで採り上げられた「奥」の概念は私の目から鱗を落としてくれた。

当時、住宅デザインに規範はあるのか、ということを考えていた。飛騨白川郷は合掌造りで有名だし、京都の町家も同様の固有のパターンを持っている。これからその地で新たに家を建てる時、同じ材料を使い同じ構法、プランニングでつくればよいのだろうか。それが本来なのだろうか。なんか変だ。

60年代からデザインサーベイが盛んになっていた。記録としてデータを蓄積するだけではなく、古い町並みや古民家を実測し、そこから現代に通用するようなデザイン要素を抽出できないかという望みもあった。

しかし、やがてサーベイも下火になる。記録としての保存はともかく、デザインとして援用しても表層的なものでしかないことが明らかになったからだろう。

では表層的でないものは何だろうか。そんな問いに対して「奥」という概念が一条の光を与えてくれた。ティピカルな茅葺き農家を考えてみよう、屋根の形は切妻、寄棟、入母屋、兜などさまざまだがプランはほぼ田の字型だ。

庭から敷居をまたいで土間に入る。ここはまだ外と同じレベル。そして一段上がったところに上り框があるが、小さい子どもはよじ登らなければならない高さ。そしてさらに一段上がって囲炉裏を切った板の間となる。基本的にはこの板の間の高さが床の高さとなり、この上に畳を敷いて座敷となる。座敷は畳の厚さだけ床が高くなる。江戸時代には農家に畳を敷くことは許されてなかった。しかし代官所の侍などが来る場合に備えて、庄屋などの家は特別に許されていて、座敷は供侍と上役のために二間ある場合もあった。この場合、奥に行くほど高貴な場所であり、併せて床も徐々に高くなっていったのである。

ここに日本の住宅の本質的な空間のシーケンスがある、

ということに気付かされたのである。

また、板の間も座敷も、濡れ縁を介してそのまま外部とつながっている。言い換えれば回遊性があり、トポロジカルな空間構成とも言える、何とも自由な空間ではないだろうか。

榎の「奥」の概念を曲解していると言われるかもしれないが、自分としては納得できるものだった。

榎の著作には至る所にこのような種が仕込まれているように思う。時には優しく、そして時には激しく本質を突いてくる。それが作品にも表れているように思う。初期の、いわばマッシヴな表情の分節化が徐々に進行する。それが決定的に表れたのが1985年、東京・表参道の「スパイラル」である。前面道路のわずかな振れを外壁に表現し、時には内部が表出し、あるところではマッサが存在を主張する。矩形と直線で構成された外観のニッチに置かれた、宮脇愛子の彫刻「うつろい」は細く滑らかに、都市に語りかけているようである。

しかし、その前年に完成した「藤沢市秋葉台文化体育館」はこれまでとはまったく違う形態で驚かされた。ステンレスのカブトムシなどともいわれてマスコットキャラになったもしたが、この流れは千葉の「幕張メッセ」、さらには1990年の「東京体育館」に継承されている。いずれも分節不可能な大空間を内包するための方法論であろう。大空間を内包する建物はいきおい外観も巨大になり、町中に大きな壁面を作り出して威圧感を生んでしまう。それを軽減させるためだと思う。

外観を単純なひとつの面とせず分節化することにも、都市に対してどのように存在させるかという課題に対して榎が出した結論ではないだろうか。

硬直化し形骸化した都市計画に形だけを与えるのではなく、生き物としての都市をつくり、そこに息吹を与えているのが榎ではないだろうか。(続く)



代官山集合住宅計画(ヒルサイドテラス) 第1期 A・B棟(1969)



第2期 C棟(1973)



第3期 D・E棟(1977) 上写真はD棟



第6期 F・G・N棟(1992) 上写真はF・G棟



第7期 ヒルサイドウエスト(1998)



スパイラル(1985)



藤沢市秋葉台文化体育館(1984)

出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)